高等学校

平成11年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

平成11年度　　〈国　語〉

教育研究員名簿

学区	学校名	氏名
2	都立深沢高等学校	造作聡美
2	都立新宿山吹高等学校	喜代田智子
3	都立大泉高等学校	上野努
4	都立文京高等学校	湯澤一夫
4	都立大山高等学校	大杉恵子
4	都立王子工業高等学校	岸本康男
6	都立向島商業高等学校	勝田不学
6	都立江東工業高等学校	岡村順子
7	都立忠生高等学校	奈良林稔
7	都立八王子工業高等学校	大越喜美子
10	都立調布南高等学校	加藤和宏
10	都立国立高等学校	白石文俊

担当

教育庁指導部高等学校教育指導課　主任指導主事　加藤明

同　指導主事　金子一彦

都立教育研究所教育経営部　指導主事　新見公康

研　究　主　題

多様な言語活動を通して、伝え合う力を育てる指導の在り方

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　主題解明の方法 …… 3

Ⅲ　研究構想図 …… 4

Ⅳ　伝え合う力を育てるための年間指導計画案 …… 5

Ⅴ　指導の実際 …… 7

1　能動的な聞き方と話合いの学習を通して、伝え合う力を育てる指導の工夫 …… 7

2　聞き手を意識したスピーチを通して、伝え合う力を育てる指導の工夫 …… 11

3　古典に親しむ学習を通して、伝え合う力を育てる指導の工夫 …… 16

4　説明文を書くことを通して、伝え合う力を育てる指導の工夫 …… 20

Ⅵ　まとめと今後の課題 …… 24

多様な言語活動を通して、伝え合う力を育てる指導の在り方

Ⅰ　主題設定の理由

1　高校生の言語生活

豊かな現代社会に生きる高校生たちの多くは、明るく会話を楽しんでいる。コンピュータ等興味をもっている対象をめぐって、積極的に話し合う姿を見かける。共通した話題があれば、互いがすぐに友人となる機会も多いようである。しかし、例えば携帯電話などでの彼らの会話は、一見非常に活発ではあるが、対象も表現方法も限られがちであると思われる。これからの社会では、仲間同士に限らず、考え方や感じ方の異なる他者とも意思を疎通させ人間関係を築くことが必要になってくる。

2　国語科学習指導の方向

このような高校生の言語活動の状況には、授業の在り方も関係している。たとえば、話合い・スピーチなどの言語活動を授業で取り上げる際にも、「話すこと」の指導とともに「聞くこと」の指導が十分なされなければ、言語活動も一方通行のまま終わってしまう。生徒に自らの言葉で考えさせる機会を十分に設け、生徒の言語活動を組織化しなければ、日常生活に役立つ言語能力を育てることは難しい。

平成11年３月に告示された高等学校学習指導要領・国語の目標には、「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」とあり、「伝え合う力」を育成することが強調されている。また、指導内容の第一に「話すこと」「聞くこと」を挙げ、読解に偏らず、論理的に意見を述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりするなど、目的や場に応じて適切に表現する力を育てることの重要性が示されている。

3　研究のねらい

私たちの生活は言語活動を中心に成り立っている。自己を表現し、相手を理解することが人間関係づくりの基盤である。このような言語能力を実際の場で活用するためには、それぞれの場に応じた、多様な言語活動を通して指導することが必要である。本研究では「伝え合う力」を「言語表現による自己と他者の相互理解、感性と思考力・表現力の相互啓発の力」と設定し、「伝えること」を「伝え合うこと」に高めることで、自らを表現する意欲とともに、他者を理解する態度を育てようと考えた。例えば音声言語活動については「話すこと」と同時に「聞くこと」の指導を、文字言語活動については「書くこと」と同様に「読むこと」の指導に注目したが、それは従来型の授業を改善し、生徒の学習活動を変えることにもつながる。加えて、コンピュータ、電子機器等の発達が、言語の在り方にも影響を与えていることを踏まえた指導の工夫も必要である。さらにその上で、音声言語と文字言語の特質を生かし、できるだけ多様な言語活動を授業の中に位置付けた。

以上、本研究においては、今後特に求められていく「伝え合う力の育成」を研究のねらいとして、上記のような研究主題を設定した。

Ⅱ　主題解明の方法

1　研究の方法

本研究においては標記の研究主題を解明するための具体的指針として、まず以下の４項目を設定し、その上で各実践が有機的な関連をもつように検討した。

①関心・意欲……他者への関心をもち、自ら考え、表現しようとする意欲を高める。
②表現力……言語感覚を磨き、自らの考えを目的や場に応じて適切に表現する。
③理解力……他者の考え方を理解し、ものの見方や考え方を深める。
④伝え合う力……他者の理解状況を推察しながら、お互いに表現し合う。

具体的実践としては、音声言語活動として、スピーチと話合いを、また文字言語活動として、和歌の創作と説明文の作成をそれぞれ中心的な言語活動とする、四つの研究授業を行った。各指導法とも２～３校で研究授業を行い、その都度、指導内容・方法を再検討し、改善を加えるとともに、生徒や学校の実態に応じて教材の開発や指導方法の工夫を重ねた。

2　研究の内容

「能動的な聞き方をと話合いの学習を通して、伝え合う力を育てる指導」では、まず３回の演習（「聞き取り演習」「ＹＥＳ・ＮＯゲーム」「三者インタビュー」）を行い、「聞く」ことの重要性を指導した上で、３人一組のグループによる「話合い」の実践を行った。それぞれのグループの３人のうち、二人が「話し手」、もう一人が「話合いコーディネーター」となり、話合いを進行・整理・調整・記録する。個々の生徒が各役割を体験する中で、「話合いにおける聞き手の重要性」を学ぶよう指導した。

「聞き手を意識したスピーチを通して、伝え合う力を育てる指導」では、写真を題材としてのグループによるスピーチを行った。生徒は問題意識をもって写真＝情報をとらえ、「真の豊かさとは何か」という共通のテーマに沿って、各グループの論を組み立てる。次にその論を的確に伝えるためには、どのような表現の工夫が必要かを考察し、発表する。この学習の過程で、「考える力」を「話す力」と「聞く力」とに結び付け、発信のみに終わらないスピーチとなるよう心掛けた。

「古典に親しむ学習を通して、伝え合う力を育てる指導」では、『伊勢物語』の第23段を教材として取り上げ、グループによるストーリーとそれに基づく個人による短歌の創作を行い、その後、逆に短歌の発表から創作意図を考えさせる実践を行った。古典に親しみながら言語感覚を磨き、また創作を通じて古典作品に立ち返り、古代の人々が心を伝え合う一つの手段としての和歌の意義と歌物語の構造を理解させるよう指導した。

「説明文を書くことを通して、伝え合う力を育てる指導」では、Ｅメールによるやりとりを前提とした学校間でのトランプゲームの説明を行った。一方の高校から、ゲームの方法を文章化した説明文を相手の高校に送る。説明が足りず分かりにくい箇所は再度確認する。この交換から電子通信機器を利用する際に求められる国語力の育成を図った。高度情報化時代を迎え、未知の人間同士が未知の内容を伝え合う状況がますます増えていることを踏まえ、実用的な文書において『伝え合う力』をどのように育成するかを検討し、考察した。

Ⅲ　研究構想図

社会的背景

・情報の高度化
・国際化
・人間関係の希薄化
・生涯学習社会

高校生の言語生活（問題点）

・表現に対する自信の欠如
・表現手段、方法に関する知識、能力不足

今までの国語教育（反省点）
・教え込むことを中心とした授業
・文学的文章の詳細な読解に偏った授業

教育課題

・中央教育審議会答申
↓
・教育課程審議会答申
↓
・新学習指導要領告示
「国語を適切に表現し、的確に理解する能力の育成」
「言葉で伝え合う能力の育成」

研究主題　多様な言語活動を通して、伝え合う力を育てる指導の在り方

（伝え合う力とは）　言語表現による自己と他者との相互理解・相互啓発の力

（指導内容）
①他者への関心をもち、自ら考え、表現しようとする意欲を高める。（関心・意欲）
②言語感覚を磨き、自らの考えを目的や場に応じて適切に表現する。（表現力）
③他者の考え方を理解し、ものの見方や考え方を深める。（理解力）
④他者の理解状況を推察しながら、お互いに表現し合う。（伝え合う力）

音声言語による活動

実践Ⅰ
能動的な聞き方と話合いの学習を通して、伝え合う力を育てる指導
（３人一組による話し合い）
・聞くことの重要性を理解する。
・聞き手の姿勢と役割を学ぶ。
・話合いを通して自己の考えを確立し、他者への理解を深める。

実践Ⅱ
聞き手を意識したスピーチを通して、伝え合う力を育てる指導
（写真を用いたグループスピーチ）
・問題意識をもち、主体的に考えをまとめる。
・発表者と聞き手の質疑応答を重視し、相互理解・相互啓発を深める。

これからの国語教育

・生徒の主体的な学習を支援する授業
・課題解決能力の育成
・音声言語と文字言語それぞれの特質を踏まえたバランスのとれた授業

文字言語による活動

実践Ⅲ
古典に親しむ学習を通して、伝え合う力を育てる指導－伊勢物語「筒井筒」－
（グループによる和歌の創作）
・伝え合いに必要な言語感覚を磨く。
・和歌という日本独特のコミュニケーションの手段に親しむ。

実践Ⅳ
説明文を書くことを通して、伝え合う力を育てる指導
（学校間でＥメールの交換）
・目的や相手、場に応じて表現する力を育てる。
・文章のやりとりを通して、他者への関心、理解を深める。

・言葉で伝え合う力　　・相手を尊重する心
・豊かな人間関係を築くために必要な相互理解と相互啓発の力

Ⅳ　伝え合う力を育てるための年間指導計画案

1　作成上の留意点

(1)　この年間指導計画は、新学習指導要領「国語総合」（４単位）を想定して作成した。

(2)　「話すこと・聞くことを主とする指導」に15時間、「書くことを主とする指導」には30時間を配当して作成した。

(3)　新学習指導要領「３内容の取扱い」に示されている言語活動例を、各単元に位置付けた。

2　「国語総合」音声言語表現年間指導計画案

学期	単　元	時数	目　標	指導事項	学習活動
1	能動的な聞き方と話合い 指導の実践Ⅰ参照	6	◦聞くことの重要性を理解する。 ◦聞き手の姿勢と役割を学ぶ。 ◦話合いを通して自己の考えを確立し他者への理解を深める。	◦より良い聞き方を身に付けさせる。 ◦「話合いコーディネーター」の役割を学ばせる。 ◦自分の意見を適切に表現させる。 ◦話合いを通して自己の考えを深め、他者の立場や考えを理解させる。	◦録音テープの内容を第三者に伝える。 ◦「三者インタビュー」を行う。 ◦「３人一組の話合い」を行う。 ◦話合いの内容を報告する。 ◦意見文を書く。
2	聞き手を意識したスピーチ 指導の実践Ⅱ参照	6	◦問題意識をもち主体的に考えをまとめる。 ◦質疑応答を重視し、相互理解・相互啓発を深める。	◦情報（写真）を問題意識をもってとらえ、考えを構築させる。 ◦メモを活用し、表現の仕方を工夫させる。 ◦質疑応答により、考えを深めさせる。 ◦相手の立場や考えを尊重して評価させる。	◦グループで写真の論点を話し合う。 ◦スピーチ原稿、発表メモを作る。 ◦スピーチを行い、質疑応答をする。聞き手はスピーチを評価する。 ◦発表者は自己評価をする。
3	報告・発表	3	◦事実を正確に伝える。 ◦収集した資料を活用して、効果的に発表する。	◦自己の体験を事実に基づいて報告させる。 ◦必要に応じて収集した資料などを活用して発表の仕方を工夫させる。 ◦聞き手の状況を意識しながら発表させる。	◦客観的な事実を集めカードに書く。 ◦カードを取捨選択し、報告文を作成する。 ◦報告文を発表する。 ◦発表を評価する。

3 「国語総合」文字言語表現　年間指導計画案

学期	単　　元	時数	目　　標	指導事項	学習活動
1	文字言語表現の基本1	1	原稿用紙の使い方に慣れる。	◦句読点、記号、改行などを適切に理解させる。	◦意された文章を実際に原稿用紙に書く。
	文字言語表現の基本2	2	短い文を書くことに慣れ、表現しようとする意欲を高める。	◦言葉の意味の面からの連想・論理的なつながりに着目してイメージを引き出させる。	◦用意された言葉から短文を作る。 ア、名詞、接続詞 イ、慣用句、四字熟語
	手紙文を書く	3	表現しようとする内容を、相手や場に応じて表現する。	◦頭語、結語、時候のあいさつ、文体に注意して表現させる。	ア、高校生活の近況を知らせる手紙 イ、お礼、感謝の手紙
	説明文を書く 指導の実践Ⅳ参照	6	相手の立場に立って正確に、分かりやすく表現する力を育てる。	◦相手に伝わるように、適切に表現することの難しさに気付かせる。	◦トランプの遊び方を説明し、相手の指摘を受けて、文章を修正をしていく。
2	意見文を書く	7	自らのものの見方・考え方を深めるとともに、考えを筋道立てて述べる。	◦反論を予想して、簡潔に意見をまとめる。 ◦多くの意見を聞き、互いの立場や考えを理解し尊重することを学ばせる。	◦新聞のコラムを基にして、自分の意見をまとめる。 ◦クラスの人の意見文の発表を聞き、自己の考えを深める。
	和歌の創作 指導の実践Ⅲ参照	4	和歌というコミュニケーション手段に親しむことにより、伝え合う力を育てる。	◦登場人物の気持ちを表現するには、どのような言葉が適切か考えさせる。	◦歌物語の登場人物の気持ちを考え、和歌の創作をする。
3	宣伝・広告文を書く	3	相手の反応や理解の状況を推察しながら簡潔で効果的な表現を心がける。	◦反応を考えてキャッチフレーズを考える。 ◦アピールポイントの生かせる宣伝文を考えさせる。	◦キャッチフレーズ、アピールポイントを考え、それを基にして催し物の宣伝文を書く。
	自分史を書く	4	自己を見つめ表現するとともに、他者への関心、共感を深める。	◦収集した情報、資料を整理して、人生の記録としての自分史を書かせる。	◦自分史年表を作成し、それを基に自分史を書く。 友人の発表を聞く。

Ⅴ　指導の実際

1　能動的な聞き方と話合いの学習を通して、伝え合う力を育てる指導の工夫

1．単元名　伝え合う力を育てるための能動的な聞き方を学ぶ。

（「国語Ⅱ」「現代語」）※研究授業は「国語Ⅱ」で実施。

2．教　材　様々な言語情報（聞き方の演習・話合い・報告スピーチ・意見文）

3．単元の目標

(1)　聞くことの重要性に気付き、様々な聞き方を学ぶ。

(2)　話合いを構築するような積極的な聞き方を身に付ける。

(3)　自分の意見を相手に筋道立てて話す力を身に付けるとともに、他者の意見も受け止め、要点をとらえることができる力を身に付ける。

(4)　話合いを通して自己の考えを深め、他者の立場や考え及び心情を理解する。

4．単元設定の理由

大人たちからは若者とのコミュニケーションの困難さを嘆いてもらす「何を聞いても、“うん”“べつに”と、一語でしか答えない。」等の発言が聞かれる。けれども、物静かに知識を受け取る姿勢を是とし、音声言語教育を十分には指導してこなかった責任も大きいのではないか。近年、音声言語教育の重要性が見直されてはいるが、「報告」や「スピーチ」等の一方通行の発信指導に偏りがちで、「対話」「会話」「討論」等の相互交信を深める指導は、立ち後れているのが現状であろう。

一方、生徒を取り巻く社会状況の変化には目まぐるしいものがある。携帯電話やＰＨＳに代表されるモバイル機器は急速に普及しており、我々の生活に欠かせないものとなっている。こうした顔の見えない相手との交信では、今まで以上に相手の発する内容を的確に聞き取る力や、相手の理解の状況を推察しつつ、適切に表現する力が必要不可欠なものになる。

本研究では、一方通行の発信にとどまらず、「双方向の話合い」を確立し、相互理解を深めるために、「聞く」学習の重要性を踏まえた指導の在り方を考えた。「話合いは聞き合い」とも言う。単に聞き流すのではなく、正確に聞き取る、心を傾けて聞く、共感しながら、あるいは批判しながら聞く、相手に対してふさわしい質問・疑問を発する等の様々な能動的な「聞く」学習の土台が構築されてこそ、「対話」「会話」「話合い」「討論」「ディベート」等の学習が本当の意味で深まっていくのである。

これからの国語の授業は、話すこと・聞くこと・書くこと・読むことのバランスのとれた力の育成を目指すべきである。本研究では、これまで軽視されがちであった音声言語活動の充実を図り、生徒の「伝え合う力」の育成を目標にした。そのために必要な能動的な聞き方の学習の実践を試みた。また、３人寄れば一つの社会が成立するという。今回の取組みでは、３人一組の話合いという場を設定した。特に、聞き手役の生徒に、話合いの司会担当と記録担当の両方を兼ねた「話合いコーディネーター」としての役割を体験させることにより、「話合いにおける聞き手の重要性」を学ばせることに主眼を置いた。

生徒一人一人が自らの言葉で発信する。他者の意見に耳を傾け、その考えを理解し、自らの意見を発信する。その繰り返しにより、自己の考えを深め、豊かな人間関係を作り上げていくことを目指して、この単元を設定した。

5．学習活動の概要（6時間扱い）

(1) 第1次・導入（2時間）　※各次は2時間続きの授業枠である。

① 今回の学習活動のねらい（聞くことを学ぶ目的）について理解する。

② 演習(1)「聞き取り演習」（正確に聞き取る演習）

③ 演習(2)「ＹＥＳ・ＮＯゲーム」（効果的な質問をする演習）

④ 演習(3)「三者インタビュー」（共感しながら聞く・相手にふさわしい質問をする演習）

⑤ 3人一組の話合いについて概略を理解する。

⑥ 話し合いたいテーマを各自考えて教師に提出する。

※普段疑問に思っていること、人の意見を聞いてみたいことをテーマ案とする。

⑦ 本時の学習を自己評価し、感想をワークシートにまとめる。

(2) 第2次・展開（2時間）　【本時3・4／6】

『本時の指導』参照

(3) 第3次・まとめ（2時間）

① 各自、話合いコーディネーターを担当したときの話合いの様子を報告する。スピーチ担当者以外は、スピーチを聞きながら、その内容をメモする。

② 3つのテーマの中で各自が最も関心をもったテーマについて、意見を400字程度の文章にまとめる。

③ 本時及びこの授業全体を振り返って、自己評価を行い、感想をまとめる。

6．指導の工夫

(1) 「考える」ことを基盤とした上で、様々な「聞く」活動と「話す」・「書く」活動を有機的に関連付けた学習活動を工夫した。

(2) 「伝え合う力」の育成という趣旨から、ペアリングやグループ分けは既存の人間関係に頼らず、新しい人間関係の結び付きを意図した組合わせとした。

(3) 1枚のワークシートに授業ごとの自己評価と感想をまとめさせ、学習に対する意識の深まりが生徒自身にも確認できるように配慮した。

(4) 教師の説明だけではなく、話合いの実例のビデオテープを視聴させることにより、学習の効果を高めた。

(5) 全員の1分間報告スピーチの時間を設けることにより、1時間の授業の中で全員が参加し、発言し、集中して聞く授業づくりを試みた。

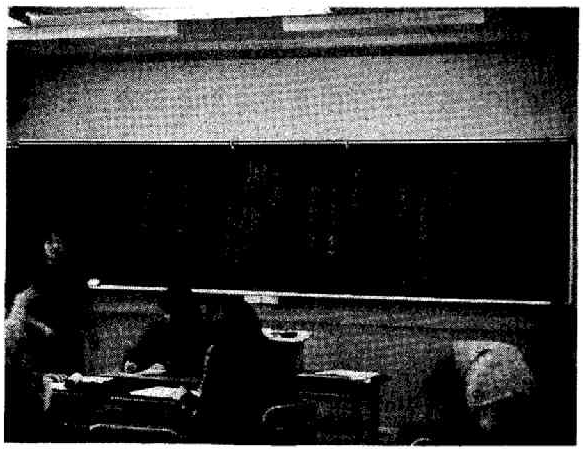
7．本時の指導（研究授業は3・4／6時）

(1) 本時のねらい

① 憶せずのびのびと意見交換を行い、様々なものの見方を受容し、理解する。

② 他者の意見を的確に聞き取り、話合いを円滑に進める。

③ 話合いの内容を深めるような聞き方を身に付ける。



(2) 本時の学習の流れ

学　習　の　流　れ	教師の指導・助言（○留意点、◆評価）
1 3人一組の話合いの方法を理解する。	○ 図やビデオを用いて分かりやすく説明する。 ◆ 話合いコーディネーターの重要性役割・心構えについて理解できたか。
2 話合いの三つのテーマを確認する。	○ テーマは、前時に生徒が提出したものを参考に決めておく。 （例）・ガンの告知、2000円札の発行、少年法と少年犯罪
3 三つのテーマについてそれぞれに各自の意見をまとめる。	◆ テーマに対する意見を100字程度でまとめることができたか。
4 グループごとに3回の話合いを行う。（1回8分で、テーマごとに役割を交替する。）	○ 話合いコーディネーターは話合いの内容を聞き取り用紙にメモしておくことを指示する。 ◆ 時間を有効に使い、活発な意見交換ができたか。
5 各自、話合いコーディネーターを担当したときの内容を報告用紙にまとめる。	○ 次時に1分間の報告スピーチを行うことを予告する。
6 自己評価と感想をまとめる。	○ 本単元開始から同じ用紙を使いながら、話合いに関していくつかの観点で自己評価をしていけるようにする。

(3) 評価の観点

① 話合いに積極的に参加し、自分の意見を相手に適切に伝えることができたか。

② 他者との相互交信により、様々なものの見方や考え方を知り、自分の考えを豊かにすることができたか。

③ 他者の意見を的確に聞き取り、話合いの進行・整理・調整・記録ができたか。

8．生徒の学習状況

「聞き取り演習」を通して、生徒は内容を的確に理解しながら聞くことの大切さを改めて感じたようである。また、メモの取り方を工夫することが必要だということに気付いている。「ＹＥＳ・ＮＯゲーム」や「三者インタビュー」では、いざ人に質問するとなると何から聞いていいかよく分からないと戸惑いを感じたようだ。また、質問が一つ一つ独立してしまい、話

を広げたり、深めたりすることができなかったという反省も多く、聞き手の難しさを実感していた。

「3人一組の話合い」では、コーディネーターという役割が一番難しく、話し手の活発な意見交換を引き出せなかったり、多角的な質問ができなかったことを反省点として挙げている者が多い。しかし、「自分と相手の意見が対立するときは、今まではどちらか一方が正しいものだと思っていたけれど、今回の話合いでどちらか一方が正しいとは言えないこともあるということが分かった。」という意見に代表されるように、他者の意見を取り入れて、自分の考えを豊かにすることができていたようだ。

さらに、「話合いの報告」の際には、他の班でも様々な意見が飛び交っていたことに関心をもち、同じ意見に共感し、自分とは違う意見を学び、考えもしなかった発想に驚きを感じて、大いに刺激を受ける場となっていた。

9．考　察

(1)　成　果

3人一組の話合いの指導において、話合いの手順やコーディネーターの役割を知るのに、ビデオ（本研究班が作成）を見たことは有効であった。音声言語の指導において、視聴覚教材の利用が成果を発揮することが確かめられた。

この3人一組の話合いは、あえて対立や論争を意図しないものとしてきた。場合によっては、なれ合いの話合いや、雑談になる危険性も懸念されたが、実際に行ってみると、共感や賛同とともに、自分とは違う発想や考え方を学び合う場として、有機的に機能していたように見受けられる。

生徒の授業全体を振り返っての感想は、「いい経験をした、ためになった」というものが多かった。これは、今回の学習内容が国語の学習の範囲にとどまらず、学校生活やその後の社会生活にも役立つものとしてとらえているためと思われる。

(2)　今後の課題

本研究では、注意深く正確に聞くことと、相手の気持ちや考えをうまく導き出すように聞くことの両方の指導を行った。特に生徒が困難を感じたのは、後者であった。相づちや促し等の具体的な方策の指導の必要性を感じた。また、様々な聞く場面で的確にメモを取ることの指導を行う必要を感じた。

話合いの成功のポイントは、テーマの設定にある。生徒のアイデアを取り入れ、授業を行うクラスの状況をよく把握して、全員が話合いに参加できるテーマを設定することが望ましい。また、問題点としては評価の仕方がある。今回は、1枚のワークシートに授業ごとの自己評価と感想をまとめさせた。そこに表れた生徒の学習に対する意識の深まりについての教師側の評価と、意見文の評価を行った。音声言語活動自体の評価は大変難しいが、その場で良い点や努力すべき点を評価する即時性を大切にしたい。充実した話合いやスピーチを再現して他の生徒に示すことや、視聴覚機器の利用等の検討を今後さらに進めていく必要がある。

今回の取組みは、決して一過性のものではなく、継続して学習を積み重ねていくことによって初めて効果が現れるものであろう。生徒の「聞く力」「話す力」は一朝一夕に身に付くものではなく、年間を通しての練られた授業計画の作成と継続的な指導が必要である。

2　聞き手を意識したスピーチを通して、伝え合う力を育てる指導の工夫

1．単元名　「伝え合う力」を育てるスピーチの授業

※研究授業は第１学年「国語Ⅰ」で実施。

2．教材　「写真」（『ナショナルジオグラフィック』日経ＢＰ社刊）より。

3．単元の目標

(1)　関心と問題意識をもって情報をとらえ、考えを築く力を身に付ける。

(2)　相手の理解の状況を推察しつつ、適切に表現する力を身に付ける。

(3)　相手の立場や考えを尊重し、能動的に聞く力を身に付ける。

(4)　話すこと聞くことを通じて互いの考えを深め、他者への理解を深めようとする。

4．単元設定の理由

現代の高校生は新しい情報機器を取り入れるなど社会の変化に素早く対応する柔軟性をもっている。また、そうした情報機器を日常生活の中で積極的に活用して仲間たちとのコミュニケーションを楽しんでいる。しかし反面、言葉によって自らの考えを掘り下げ、意見として他に発信しようとする意欲に乏しい。情報についても、その性質を吟味し見極めた上で取捨選択する態度が十分に身に付いているとは言い難い。情報化、国際化等により社会は多様化し複雑さを増している。こうした社会の変化の中で、主体的に自らの考えを築く力、他者との対話によって自己の考えを検証し深める力、「違い」を前提としつつ他への理解を深める力が今まで以上に強く求められている。また、氾濫する情報にほんろうされないためにも、問題意識をもって情報と向き合おうとする姿勢がますます必要とされている。この単元はこうした観点から次の二点をねらいとして設定したものである。

一つは、自・他の相互理解、相互啓発を進める力としての「伝え合う力」をはぐくむことである。「スピーチ」の授業は話し手と聞き手が固定され一方通行になりがちだが、この授業は、そこに対話的要素を取り入れたものとして計画した。グループの発表とし、発表後の質疑応答を重視したのは、一つの論を組み立てる過程の中での対話、発表者と聞き手との対話から相互理解が深められ、互いを啓発し合う力が養われることを期待したからである。

もう一点は、主体的に情報をとらえる力をはぐくむことである。スピーチでは、１枚の写真を基に自分たちの生活や現代社会を見つめ、意見を述べることを課題とした。写真をはじめとするビジュアル情報は、受け手の自覚のないまま感性や価値観の領域に浸透しやすい性格をもつ。ビジュアル情報が、近年その重要度を増し、私たちの身の回りにあふれる現状を考える時、１枚の写真を自分たちの生き方や自分たちを取り巻く社会と関連させて見つめさせることは意義あることと考えた。情報は十分に消化され、自己の考えを深めるものとして活用できた時、最も意味をもつ。従って、情報を「生かす」ためにも、主体的に情報と向き合い、自らの問題意識とのかかわりからとらえようとする姿勢が要求される。

また「伝え合う力」を高めるためには「考える力」「話す力」「聞く力」の三つの力が有機的に結び付けられることが必要になる。スピーチを選んだのは、「討論」や「ディベート」より、じっくりと自分の意見を発表できるというスピーチの長所に注目したからである。この授業では、自らの考えを深めようとする意欲が、話し方の工夫や能動的に聞く態度に発展的に結び付けられることを目標としている。

5．学習活動の概要（6時間扱い）

(1) 導入・準備（3時間）

① 例示された写真について、「真の豊かさ」というテーマで200字以内の作文を書く。

② 各グループ1枚ずつ写真を選び、自分たちがどのような論点でその写真に迫ることができるか話し合う。

③ 写真から情報を取り出して取捨選択し、ワークシートに記入する。調べる必要のある事柄については分担を決めて次回までに調べる。

④ 調査結果を踏まえながら、スピーチ原稿作成のためのワークシートを作る。

⑤ 原稿作成者を決め、次回までにスピーチ原稿を書いてくる。

⑥ スピーチのテーマを決めて原稿の手直しをし、スピーチメモを作る。

⑦ グループ内でスピーチのリハーサルをして、話し方や効果的な発表の仕方について工夫する。

(2) 展　開（2時間）

『本時の指導』（5／6時参照。）

(3) まとめ

発表グループは評価シートを受け取った後、よかった点、不十分な点について自己評価シートに記入し、2分程度で発表する。

6．指導の工夫

① 「伝え合う」ためには発信以前に自分の考えをきちんともつことが大切であると考え、動機付けと問題意識をもたせる段階を設定した。

② 現代的問題を多く含み、話し手と聞き手の双方が関心をもつような教材を選んだ。

③ 質疑応答を充実させるためにスピーチ中はグループ全員を壇上に上がらせた。

④ 聞き手の参加を重視して、スピーチ後はすべてのグループを質疑応答に参加させた。

7．本時の指導（5／6時）

(1) 本時のねらい

① 十分な準備のもと、大勢の人たちに向かってスピーチをする力を付ける。

② 聞き手も参加することによって、積極的にスピーチを聞く力を付ける。

③ 発表者と聞き手の相互交信により、互いの理解と考えを深める。

(2) 本時の学習の流れ

学　習　の　流　れ	教師の指導・助言（○留意点、◆評価）
1 グループごとに席に着く。	○ 聞き手もグループでスピーチを聞かせる。
↓ 発表グループは全員壇上へ。	○ 役割分担に応じた態勢をとらせる。（質疑応答にグループ全員で対応するため）
↓ 2 写真を聞き手に提示し、スピーチテーマを予想してもらう。	○ 聞き手が参加するための動機付けであり、あまり時間をかけない。
↓ 3 スピーチテーマを述べてからスピーチ本体に入る。（3分程度）	◆ 聞き手に理解してもらえるような工夫があるか。
↓ 4 スピーチについて各グループ内で検討し、発表グループと質疑応答を行う。	○ すべてのグループが質疑応答に参加するようにする。 ◆話し手と聞き手との活発な交流があったか。
（2～4の繰り返し）	

(3) 評価の観点

① 問題意識をもって取り組んでいたか。自分たちの考えが表れていたか。

② 発表者は、聞き手に理解してもらうための工夫をしていたか。

③ 聞き手は理解に努めていたか。

④ 発表者と聞き手との間に相互理解や互いの考えの深まりがあったか。

8．生徒の学習状況

(1) 200字作文～最初の共同作業

最初に行ったことはグループとして1枚の写真を選ぶことであった。あらかじめ写真誌とＮＡＳＡのインターネットのライブラリーから8枚の写真を選んでＡ3サイズに拡大カラーコピーしたものを用意しておいた。これを早い順に取らせたために直観的に関心をもった写真を選んだようである。

始めに全員に「真の豊かさ」というテーマで200字の作文を書かせたのは、グループ学習を行うに当たって、一人一人がこのテーマに対して問題意識をもってもらいたかったからである。

次にグループとしてのスピーチの方向性を、「スピーチ準備シート」を使って検討させた。シートの3項目に、「必要な情報を取り出そう」という欄があるが、ここをどう記入したら

よいのか戸惑うグループが多かった。しかし、項目の立て方の具体例を示すことによって急に作業が活発になった。１枚の写真をグループの全員で見ながら、盛んに気が付いた事柄を出し合っていた。

(2) スピーチ原稿の作成

「スピーチ準備シート」と「スピーチ原稿」の間に「スピーチ原稿準備シート」というものを書かせる作業をさせたが、これほどいろいろな作業シートを用意する必要はなかったと思われる。また、スピーチ原稿を書く作業が一人の作業となってしまった。はじめは宿題として次の授業までに書いてくるように指示する予定だったが、一人の生徒だけに負担を強いるのが困難なために、結局、授業時間中に時間をとって原稿を書かせた。

(3) 〈事例〉〈グループＡの学習活動から「スピーチ準備シート」〉

スピーチ準備シート　　組　　班

グループメンバー

撮影者の意図

宇宙から見た地球のすばらしさを地球の人に気づいてほしかった。

どのような点から「豊かさ」について論じられるか。

・宇宙へ行けるほどの人類の偉大さ。
・月の砂漠の様な景色に比べて、地球は緑にめぐまれている。

必要な情報を取り出そう。

ｉ 月へ初めて人類が到達したのは何年か？
ii 宇宙から見た時の宇宙のさびしさ、きびしさ、悲しさについて。
iii 月についてのいろいろ。
iv 地球外生命体（月にうさぎなど）について。

調査の必要な事柄　（調査の分担も決める）　　調査担当

1 月へ初めて人類が到達したのは何年か？
2 宇宙から見た時の宇宙のさびしさ、きびしさ、悲しさについて。
3 月についてのいろいろ。
4 地球外生命体（月にうさぎなど）について。

［考　察］

→ 撮影者がどのようなテーマでその写真を撮ったのかを考える。教材への関心をもたせるというねらいもある。

→ グループとして最も論じ合ったところ。写真をどう受け取るか、何を論じるかといった内容の中心となる部分。

→ 共同作業の楽しさがあったところ。他のグループではもっと多くの精密な情報の読取りもあった。

→ 各項目についての担当者を決めることによって、スピーチ後の質疑応答が充実した。

(4) スピーチ発表会

スピーチ自体は各グループとも原稿がよく書けていたこともあって、内容的には充実したものであった。ただ、聞き手を意識していたかどうかという点になると難しい面がある。よく書けた小論文を読み上げただけという印象のグループが幾つか見られた。話し方については、練習を積んだグループから棒読みに近いグループまでかなりのばらつきがあった。

今回は「伝え合う力を育てるスピーチの授業」ということで、聞く側の活動を重視した。一つのグループがスピーチを終えた後、聞き手グループ内で今聞いたばかりのスピーチの内容について、もっと知りたいこと、疑問点、よかった点などを話し合わせて、各グループに述べさせた。それに対して、発表グループの調査担当者がかなり詳しく説明し、質問者を感心させる場面もあった。

9．考　察

まず、グループ学習という形をとることによって、メンバー同士の「伝え合う力」の育成を考えた。たまたま集まった者同士、いずれは壇上でのスピーチへと力を結集していかなければならない。グループ内の「伝え合う力」は自然に強まっていったようである。グループ内の活気がスピーチの場での活発なやりとりに結び付くことを期待した。しかし、発表者の考えていることは、とにかく無事に話し終えることであり、聞き手も他の発表を聞くことにそれほど積極的だったとは言い難い。いかにして「伝え合う」意欲をもたせるかということが、今回の授業のポイントになる。

そのためにとった方法の一つは「写真」を提示することである。現在、社会のあらゆる場面で視覚に訴える表現方法がとられている。国語の授業だから言葉だけでスピーチを行うという考え方もあるかもしれないが、ビジュアル情報は伝達を補助するものとして非常に有効な一面をもつ。今回は分析の対象としてだけではなく、プレゼンテーションの観点からも写真を積極的に活用した。スピーチにおいて写真を使う利点は、聴衆の視線を集中させることができる点にあり、生徒の関心を引き付けることができたという意味では大きな効果があった。

そして最も大切なのは、聞く側をいかにスピーチ活動に参加させるかである。発表終了後すぐに聞き手グループ内で話し合わせ、もっと知りたい点、質問したい点、良かったところ、悪かったところをすべてのグループに言ってもらうことにした。グループによっては盛んなやりとりが見られたが、一方的な発言のため活発な意見のやりとりが妨げられる場面もあった。メモを取るなど意欲的に聞くための動機付けをしたが、必ずしも十分ではなかった。自然に発言し合うためには、発言者、聞き手双方に伝え合おうとする意欲が必要である。

聞き手側の聞こうとする意欲を養うことが今後の課題であり、そのためにも聞き手の関心を引きつけられるような題材をさらに開発していく必要がある。今回は現代社会の諸問題について論じようとした意欲的なグループが多かったため、スピーチの原稿はよいものが書けていたが、聞き手側の関心を十分には引き出せなかった点が悔やまれる。

「伝え合い」を作り出せるスピーチの授業を実践するためには、生徒の気持ちの動きなどもあらかじめ予想しながら、さらに適切な題材と方法を作り出していくことが必要である。

3　古典に親しむ学習を通して、伝え合う力を育てる指導の工夫

1．単元名　古典に親しみながら「伝え合う力」を育てる授業

2．教　材　伊勢物語第23段「筒井筒」

3．単元の目標

(1)　和歌の贈答を理解して、言語感覚を磨く。

(2)　自己を見つめ、自らのものの考え方を深める。

(3)　書き手、読み手として互いの立場や考えを理解し尊重する。

4．単元の設定理由

現在、私たちは、言葉によって意思の疎通を図るためのスピーディーで便利な手段を数多く持っている。しかし、実際にどれほど深い交わりをもてているかという点になると、少し疑問を感じる。むしろ言葉の伝達に時間のかかる不便さを抱えていた時代の方が、人は自然に能動的な聞き手や話し手であり得たはずだ。かつては、どうすればよりよく相手に伝わるか言葉を選んでいた書き手や、待ちこがれて行間にこもった相手の思いを心で補いながら懸命に読みとろうとした読み手がいた。しかし、そのゆとりが現代人には無いのかもしれない。携帯電話、メール、つけっぱなしのテレビなど言葉は時と場所を選ばず否応なしにあふれでてくる。

このような言葉の氾濫の時代だからこそ、表現者の思いについて相手の立場や背景を推察できる理解力を育てるとともに、他者を思いやり、どう感じられるかを想定しながら表現できる力を育てることが必要である。そして他者への表現や理解が、自己を見つめ自らのものの見方や考え方を深めることにもなると考えられる。

今回、古典教材を選んだのは古典の世界に生きる人々が伝え合うための独自の手段として和歌を用いており、そこに能動的な書き手と読み手との姿が描かれていると考えたからである。そこでまずその姿を古典教材の中から選び、それをきっかけに生徒自身も登場人物の気持ちになり和歌を作ることによって和歌の贈答を追体験する。そして互いの和歌を理解し合う中で、他者の理解と自己の思い、他者の思いと自己の理解、それぞれに対する共感、他者による新たな自己の発見などを通じて「伝え合う力」を育成したいと考え、本単元を設定した。

5．学習活動の概要（７時間扱い）

(1)　第１次（２時間）

①　単元全体の学習のねらいを理解する。

②　男女混合で３人から６人のグループに分かれる。

③　辞書を使わず、グループ員の言語体験だけで本文の現代語訳を試みる。

④　各班の現代語訳一覧を見て、各班の微妙なニュアンスの違いを確認する。

⑤　歌物語、および古来の和歌贈答の習慣について理解する。

⑥　本文の和歌には登場人物のどのような気持ちが込められているのか。また、その気持ちはどこで分かるのか、ノートにまとめ提出する。

(2)　第２次（２時間）

①　提出したノートの中から、よく読み取れているものを紹介する。

②　当時の成人式や結婚の習慣について知る。

③　この物語の続きを創作するために、グループに分かれる。

④　各グループのストーリーの登場人物になり代わって、各自、3首の和歌を作る。

⑤　創作した和歌にかかわる詳細なメモを添えて提出する。

(3)　第3次（3時間）

①　和歌一覧プリントから好きな贈答歌を各自2組選ぶ。選んだ人の多かった贈答歌3組を発表し、そのうち一組を選んで鑑賞する。次に自分の出席番号と同じ番号の贈答歌について鑑賞する。

②　※本時の指導参照

③　自作の和歌について書かれた他の生徒の鑑賞メモを読む。

④　他の生徒の鑑賞メモについての感想を提出する。

6．指導の工夫

(1)　古典の中で「伝え合う」姿が端的にあらわれている形式として歌物語を選んだ。

(2)　言葉の意味を各自に推測させるために、あえて辞書を使わせない工夫をした。

(3)　自由に和歌を作れと指示しても無理なので、古典の実例に続ける形をとった。

(4)　既存の和歌ではなく、生徒の作品を互いに理解し合うことで、作者からその創作意図や背景を聞くことができる。そのことから伝え合うことの難しさや喜びを体験できるようにする。

(5)　グループ分けは、男女混合にした。

7．本時の指導（6／7）

(1)　本時のねらい

①　作者の説明を聞き、自分の鑑賞との一致点や差異を確かめる。

②　自作の和歌について他者の鑑賞を聞くことにより、共感や違う見方があることに気付く。

③　①、②を通じて自己のものの見方を確認する。

(2)　本時の学習の流れ

学　習　の　流　れ	教師の指導・助言（○留意点、◆評価）
1　選ばれた贈答歌について、どのような鑑賞があったかを知る。	○　選ばれた贈答歌の作者名は伏せておく。生徒の鑑賞メモを紹介する。
↓ 2　選ばれた贈答歌の作者が自分の和歌について解説する。	○　あらかじめ選ばれた贈答歌の作者には自作についての説明の準備をしておくよう指示する。 ◆　説明を聞いて新しい発見があったか。
↓ 3　伊勢物語第二十三段の省略部分のプリントから原作の結末はどうなるのかを理解する。	○　和歌を中心におおまかな説明をする。
↓ 4　各自の理解と作者の解説との差異や一致点を確かめ、原作の結末の感想をまとめる。	○　他者の見方と自己の考え方を比べて、自分を見つめられるよう働きかける。 ◆　自分なりの発見を文章にまとめることができたか。

(3) 評価の観点

① 和歌の解説を聞くことによって新たな発見はあったか。

② 和歌についての他者の理解の仕方を知ることによって、新たな発見があったか。

8．生徒の学習状況

(1) 第１次

日ごろ、辞書を引くようにと指導していたにもかかわらず、今回はあえて辞書を使わないと説明したので冒頭は戸惑っていたが、一つの単語にグループで話し合いながら意味を与え、筋の流れを探そうとする活発な声が聞こえた。例えば「田舎わたらひ」の「わたる」も「暮らす」なのか「行く」なのか類推しあう中で、辞書的な意味も自然に出てきた。また、「親のあはすれども」の「あふ」も「この女をこそ得め」が伏線になって「どうやら見合いをさせるようだ。」との声も聞こえ、「結婚する」に近い線がでてきた。このように辞書を使わないことで、単語の意味や話の流れを知りたいという意欲が高まっていた。

(2) 第２次

グループでのストーリー作りは次の和歌創作のためのステップで、興味深かったのは、本来の結末のように結局なじみの男女が幸福になるという結末が多かったことである。

和歌の創作は「できれば古典文法で」という程度の言い方であったが、意外に古語での和歌を試みようとした生徒が多かった。全く自由な自己の気分ではなく、自分たちの作ったストーリーの登場人物に感情移入して和歌を作るという制約があり、生徒はかなり苦労していた。しかしそうしてでき上がった作品が、他者にどう読まれるかについては興味をもっていた。「思い」と「想い」、「悲しみ」と「哀しみ」、など用字についてもイメージをより効果的に表す文字を選ぶことに神経を使っていた。

プリント4感想

①原文の結末を読んで　クラス　NO.　氏名

私たちの班が考えたのでは、高安の女だけが幸せになるという話だったけどそれとは全く反対の結果だったので色々な話ができるのだなと思いました。原文の幸いスゴイと思いました。自分の気持ちを押さえて男を送り出すことはなかなかできないことだと思います。でも、高安の女は男のことを待つ姿はなんかかわいそうだと思います。

②自作の和歌に対する「鑑賞メモ」を読んで

ほとんど意味が合っていたのでビックリしました。違うところを見ると、こういう意味の取り方もあるんだなと思うところもありました。

③「筒井筒」の授業を通してどのような力が身につくと思いますか。

文から和歌を作る力、和歌から想像して話を考える力

④「筒井筒」の授業について

和歌を話に合わせて考えたり、和歌から話を考えることは、今までやったことのなかったのですごく難しかったです。女や男の気持ちになって作らなくてはできなかったので困ることが多かったけど自分なりによくできたと思います。最後に本当の文章を読んで自分達のと比べるのは違うところや同じところがあったりしておもしろかったです。話も恋に関する話だったのでやりやすかったと思います。

(3) 第3次

自作の和歌について他者の鑑賞メモを読んだ生徒の感想は、自作の和歌が大筋では理解されたとするものが多かった。また他者の誤解についても、そんな理解もあったのかとむしろそれを喜んでいるかのような発言もあった。中には誤解というよりも作者以上に深い理解だった、と述べる生徒もいた。このように生徒は作者として、また鑑賞者として、言葉の至らない点と、至らないがゆえの言葉のおもしろさとを味わっていた。

9．考　察

生徒にはそれぞれの作業の始めに次の点について説明した。

(1) グループで訳す時、辞書を使わず、これまでの言語体験の総力を挙げて訳すこと。

(2) 和歌を作る時、話の流れの大事なポイントで登場人物の訴えたい気持ちが伝わるように言葉を選ぶこと、読者にどう理解されるかを想定すること。

(3) 他者の和歌を鑑賞し、その粗筋を推測する時、言葉の様々な意味や足りない部分を補いながら読みとること。

(1)については教材への興味関心を高めることと受信者として言語感覚を磨くことを意図した。当然のことだが私たちは言葉の意味をすべて辞書によって獲得したのではない。生きた場面の中で意味を推察しながら言語感覚を磨いてきたのである。この作業によって古典作品の中でも同様の体験をさせ、和歌に親しませることができた。

(2)、(3)については、発信者として言語感覚を磨くこと、他者を想定し他者との違いや一致点によって自己の考えや感じたことを確認し発見すること、言葉の不確かさを考え、それを補い、互いの気持ちや考えを尊重することを意図した。ここでは最善を尽くしたはずの表現も、他者の理解には深い理解や誤解も含め様々なものがあることについて学習させることができた。しかし、考えや感じたことを確認し発見させるためには、このような授業を定期的に繰り返すか、和歌を推敲し再提出させるといった展開を工夫しなければ深まらない。

また、展開についての技術面としては、授業が生徒の提出物によって成り立っているので、翌日に次の授業がある時など生徒はその日の内にプリント類を提出しなければならず、粗筋や和歌等を作る十分なゆとりをもたせられなかった。また、自作の和歌が他者にどう読まれたかについて必ずしも全員に学習させることができなかったクラスもあった。

多数の生徒に選ばれた和歌の作者は一様に自分の作品が予想以上に深く読まれていたことに感激していた。「予想以上に」とは、懸命に読み取ろうとする他者によって自己の作品が他者の心に別の世界を作っていることを感じたからであろう。このような「伝え合う」ことの創造的な面も視野に入れることが今後の課題である。

4．説明文を書くことを通して、伝え合う力を育てる指導の工夫

1．単元名　未知の相手に送る説明文の書き方を学ぶ

2．教　材　トランプゲーム・マニュアル

3．単元の目標

(1)　未知の相手に適切に情報を伝えようとする。

(2)　相手の立場に立って正確に、分かりやすく表現する力を身に付ける。

(3)　Ｅメールにふさわしい文章の書き方を学ぶ。

4．単元設定の理由

コミュニケーションにＥメールが使われることが多くなってきた。消費者からメーカーに届けられた質問文には、一読して理解できないものが意外に多いという。今、相手の立場に立った国語力が求められている時代であるといえる。相手の立場に立って正確に、分かりやすく表現する文章の基本を学ぶことを目的にこの単元を設定した。

あるメーカーには、パソコンやデジタルカメラの接続方法など技術的な質問が、１日およそ500件寄せられる。そのうちＥメールでの問い合わせが約２割。Ｅメールは、利用者がいつでも問い合わせできるため、その数は急増している。ただし、Ｅメールは電話に比べ、利用者との間に行き違いが多い。Ｅメールは電話とは異なり、その場で聞き返すことができないからである。Ｅメール時代において、未知の人間に未知の内容を伝える場面が多くなっている。

このことはコミュニケーションの行き違いを助長する大きな要素になっている。未知の相手に未知の内容を伝えるマニュアルのような文章を書かせることを通して、Ｅメール時代に対応する文章指導はできないものかと考えた。

かつて、マニュアルが読みにくいと言われた時代があった。今では、マニュアルの書き方も整備され、ずいぶん読みやすくなってきている。マニュアルに携わる人々が分かりやすいマニュアルを目指し、苦心してきた成果である。今回の指導は、近年できあがってきたマニュアル作成についての現場の指針を参考にして、指導内容を検討した。

しかし、電気製品などの取扱い説明書は、説明文を作る側と説明文を読む相手の手元に同じ製品があればこそ成り立つものである。今回は、製品のかわりに、トランプを用いることにした。その理由は、１．手軽に用意ができる、２．知られていないゲームが多い、３．文章だけでは説明しにくい要素がゲームの中に含まれている、の三点である。ワープロを使い、Ｅメールとして送信できる文章にし、それを面識のない他校の生徒に送る。他校の生徒は、「送られた説明文を頼りにゲームができたか」「分からない部分はどこだったか」を指摘する。説明文の作成者は、相手の反応を受け取り、それを基に文章を修正する。この一連の流れを通して「相手の立場に立って正確に分かりやすく表現する」文章作成の基本を学習させることにした。

5．学習活動の概要

(1)　第１次・導入（３時間）

①　今回の学習活動の説明を聞く

②　ゲーム内容の説明を聞く

ゲーム名：コパック――手札と場札の数字を合わせて、取り札を増やしていくゲーム。

③　実際にゲームを行い、ルールや進め方を確認する。

④　相手に伝わる文章を書く上で大切なことは何かを考える。

⑤　説明文作成上の留意点をプリントで理解する。

⑥　実際の取扱い説明書やマニュアルを参照し、よい点を学ぶ。

⑦　取扱い説明書に寄せられた苦情の例を基にその解決方法を考える。

(2)　第２次・展開 ── 説明文作成（４時間）

①　グループごとの作業分担について理解する。

②　Ｅメールで送信できる文字・記号を確認する。

③　説明文を作成する。

④　各班の文章の曖昧な点を、班ごとに点検し合う。

⑤　説明文を完成させる。

●完成させた文章を他校の生徒に送信する。

●他校の生徒は、不明な点をまとめて返送する。

⑥　『本時の指導』参照

(3)　第３次・まとめ（１時間）

①　前時に引き続き文章を修正する。

②　今回の学習で学んだことをプリントにまとめる。

６．指導上の工夫

(1)　文章だけでゲームの説明をさせた。

あえて文章だけを用い、言葉の使用の難しさを体験させた。生徒にゲームの内容を把握させる際、身振り手振りを交えながら口頭で行った。説明しにくい概念は図にし、プリントを見ればゲームの概念を確認できるよう配慮した。

(2)　生徒が知らないゲームを選んだ。

ポピュラーなゲームでは説明文の出来不出来にかかわらず、相手が文章に頼って理解しようとはしない。あまり生徒には知られていないゲームを選び、相手が説明文を頼りにしなければ内容を理解できないような状況を作った。

(3)　説明文作成の留意点をマニュアル作りの専門家の実践を参考にして検討した。

マニュアルや取扱い説明書の作成には、通常の文章とは違う視点や書き方が必要になる。説明文作成の留意点をまとめ、生徒に示した。

(4)　班単位で活動させ、作業を班内で分担させた。

各班４人とし、さらに班内を二つに分けた。班を編成することにより、作業時間を短縮し、文章の推敲・校正効果をあげるとともに、互いに協力し合って、作業に参加させることをねらった。

(5)　説明文を書くことの難しさを体験的に学ばせるようにした。

文章作成時、ルール内容の確認以外は指示をせず、あくまでも班内の生徒同士で作成させるようにした。

7．本時の指導（7／8時）

(1) 本時のねらい

① 読み手（相手校）の評価を通して説明文の作成がいかに難しいかを実感する。

② なぜ相手が「分からない・分かりにくい」と指摘したのかを考える。

③ 文章の修正を通し、説明文の基本的な書き方を理解する。

(2) 本時の学習の流れ

学習の流れ	教師の指導・助言（○留意点、◆評価）
1 作成した説明文に対する読み手の評価を受け取る。	○ 読み手の評価基準を確認しておく。
2 生徒が作成した説明文によって「陥りやすい誤りについて」理解する。（パソコン画面を活用）	○ 生徒の作った文の中から指導に利用できるものをあらかじめ用意しておく。 ◆ 分かりやすい説明文の書き方を理解できたか。
3 読み手及び教師が指摘した内容をまとめた用紙を受け取る。	○ 読み手の指摘に分かりにくい部分がある場合には、あらかじめ整理して生徒に提示する。
4 受け取った用紙を基に、各班ごとに文章を修正する。	◆ 相手の指摘を受け止めて、文章を修正できたか。

(3) 評価の観点

① 予想した反応と実際の反応との違いに気付くことができたか。

② 相手の指摘を受け止め、文章を修正できたか。

③ 説明文の基本的な書き方を理解できたか。

8．生徒の学習状況

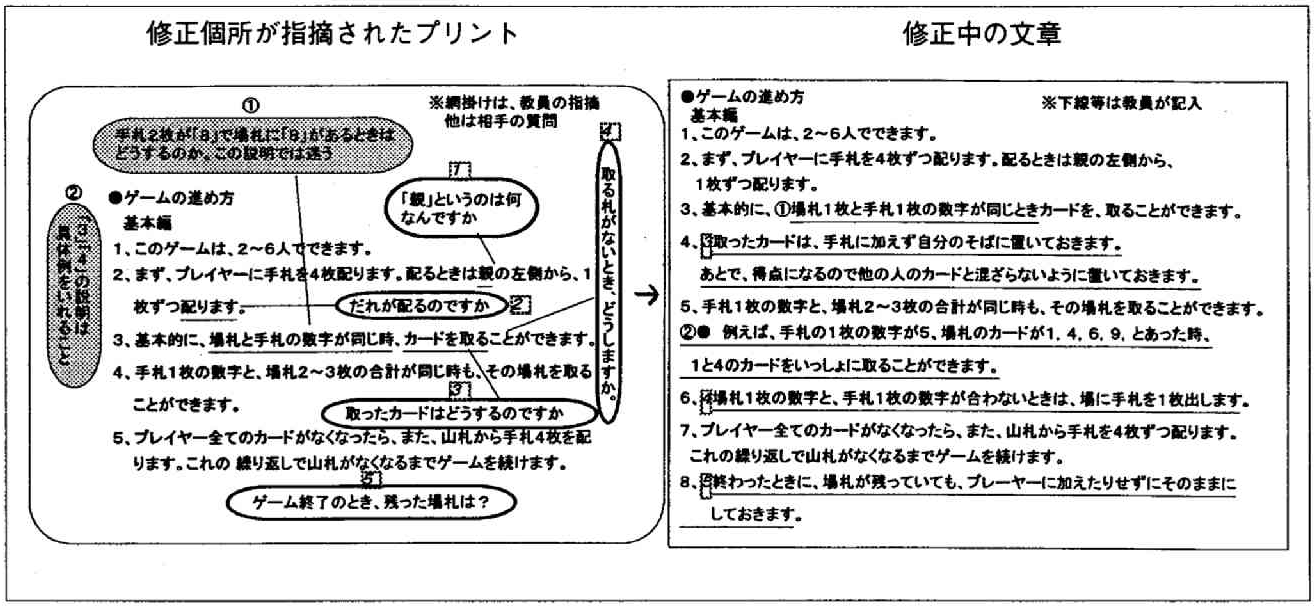
導入では、文章作成の留意点を教室で説明した。特に、マニュアルの不備で会社側が敗訴した事例についての説明に生徒は興味を示した。

展開から、パソコン室での作業となった。各班、「ゲームの基本編（基本的な遊び方）」を担当するグループと「応用編（説明が困難とされる概念が含まれている）」を担当するグループに分かれて作業を進めた。文章を作成するのに苦労している生徒もいたが、自分たちで考えて作成するように励まし続けた。「応用編」に取り組む生徒は、やはり難しいのか、画面を見ながら腕組みしている生徒が何人かいた。作業を早く終わらせる班もあったので、用意しておいた「ゲーム全体の概念」や「攻略法」についての説明文作成にも取り組ませた。「もう一度見直した方がよい」と助言すると、訂正箇所を自分なりに見付け、修正を加えていた。

作成した文章を相手校に送った。各説明文に対して「分かる」「分からない」の評価をより客観的にするために、読む側の生徒もグループごとに説明文を読んだ。結果は、全班の説明文が「分からない（ゲームをするのは無理）」であった。「この説明ではゲームができない」との

結果に生徒たちは当初かなりショックを受け、「相手の理解力が足りないからだ」と憤慨していた者も多かった。そこで、パソコンの画面を使って「生徒の作った文章のどこが分かりにくいか」を解説した。その後、相手からの細かい質問や教師の指摘が入ったプリントを基に文章を修正させた。そんな中「こんな説明じゃ相手は分からないよ」という反省の声も何人かから上がり始め、生徒相互に指摘し合って学習する姿が見られた。

授業最後の感想文に「てんの打ち方を工夫する」「『の』を使いすぎると読み手が分かりにくい」「全体的な説明をしておいてから細かく説明する」など、説明文の基本的な書き方に触れるような点を反省として上げている生徒が意外に多かった。



9．考　察

授業の当初は、「読点の打ち方」「文体」「説明文に望ましくない文型」「抽象的な表現・具体的な表現の活用」など、文章技術を身に付けさせることばかりに目を向けていた。しかし、日常のコミュニケーションの行き違いの大半は「ものの見方」「受け取り方」の相違から来るものである。実際、「この説明ではゲームができない」との評価を相手校から受けた大半の原因は、「こんなことくらい説明しなくてもいいだろう」という思い込みからくる説明不足だった。ほとんどの生徒が「相手に伝わる文を書くのはとても難しい」「説明の仕方がこんなに難しいとは思わなかった」など未知の事柄を文章のみで相手に伝える困難さを痛感していた。またその後の生徒の感想で、「自分が分かるから、相手も分かるだろうという思いこみをなくし、もっと分かりやすい言葉で書く」という、コミュニケーションにとって一番基本的な心構えに言及している生徒が何人かいた。

今回の授業の一番大きな成果は、日ごろ自分たちがいかに読み手を考慮しない自分中心の文章を書いていたかを生徒に自覚させたことである。パソコンの活用も意欲的に学習に取り組ませる大きな要素となった。また、文章を実際に読んでくれる他校の相手を設定したことにより、生徒に伝え合うことの緊張感を呼び起こすことができた。今後も引き続き、高度情報化社会に対応しうる文章表現活動を取り入れ、相手の視点に立った表現意識・言語感覚を磨かせる指導を継続していきたい。

Ⅵ　まとめと今後の課題

1　研究のまとめ

今回私たちは、「伝え合う力」をどのように育てるかを研究し、様々な実践を行った。高校生に、彼らが仲間と語り合う時に示すような共感や理解を、仲間ではない他者にも示し、互いの思いや考えを「伝え合う」意欲と自信をもち続けてほしいからである。しかし、「伝え合う力」を育てることは簡単ではない。何をどのように伝え合うのか、そのためには何が必要なのか。なぜ「伝え合う」ことが大切なのか。私たちは、今回の四つの実践を通じて、一貫してこれらの課題を追究したが、それは、私たちの授業の改善にもつながった。

音声言語表現については、写真やビデオを用いた新しい教材の開発や、今まで見落とされがちであった「聞くこと」の指導の充実を図った。生徒は、様々な演習を通じて、「聞くこと」の重要性に気付き、話合いにも正確に聞く力と効果的に尋ねる力が大切であることを学んだようである。また、「スピーチ」の指導では、「考える力」を土台としたスピーチ発表を目指した。さらに、スピーチを一方通行に終わらせず、聞き手との相互交信が深められるような授業づくりを行った。「写真」を用いてのスピーチは、生徒たちにとって新鮮であり、意欲的に取り組んだ。

文字言語表現については、歌物語のストーリーを再創造させ、和歌の創作を通じて仲間と「伝え合う」ことの楽しさを体験した。また、Ｅメールという新しい電子機器を用いた、未知の相手との交信にチャレンジし、実用的な文章を作る際の留意点やパソコンを使っての文章作成を学んだ。生徒は、相手の立場に立って正確に分かりやすく表現することの難しさを実感したようである。

これらの指導を通して、生徒は様々な場面・相手・目的に応じた表現の必要性を自覚し、それを自己の課題として取り組み始めた。何よりも「伝え合う」ことの楽しさを知り、意欲的に自己を表現するとともに他者を理解するようになった。今まで気が付かなかった仲間の思いや考えを発見し、新鮮な驚きと感動があった。また、仲間や未知の相手と「伝え合おう」と試み、思いや考えが伝わらなかった体験から、身近な相手に対しても「伝え合う」ことがいかに難しいことかを実感することもできた。いずれにしても、「伝え合う」ことが人間関係を築き、「伝え合い」を続けることがそれを豊かにすることを生徒が学んだことは、本研究の大きな成果である。

2　今後の課題

(1)　言葉で「伝え合う力」を育成するための指導を、年間の指導の中で計画的に展開させる必要がある。単発的な指導ではなく、音声言語と文字言語それぞれの特性を踏まえた、年間を通して継続的に実践を進める必要がある。

(2)　音声言語表現の評価に対する研究は、文字言語表現に比べるとまだまだ不十分である。生徒の言語表現を肯定的にとらえることと、評価の即時性を大切にすることをおさえて、今後の研究を深めていくことが課題である。

(3)　様々な場面や相手に応じて「伝え合う力」を育てるような教材を開発することが重要である。また、視聴覚機器やパソコン、Ｅメール、インターネットなどを活用した、時代の変化に応じた新しい指導法の研究が不可欠である。